

ウイズ・コロナ／ポスト・コロナ時代の 子どもの「育ち」と「学び」

緊急調査の結果が教えてくれること

野井 真吾

のい しんご
1968年生まれ
日本体育大学教授、博士（体育科学）
子どものからだと心・連絡会議 議長
教育科学研究会「身体と教育」部会 代表
主著に『新版からの「おかしさ」を科学する』
(かもがわ出版、2013年)、『からだの元気大作戦』
(芽ばえ社、2016年)等

日本の子どものからだと心は人類史上初ともいえる危機に直面している。加えてこの一年は、さらなる試練が子どもを襲っている。いうまでもなく、新型コロナウイルス感染症の猛威がそれである。「二〇二〇年がコロナ一色になること」「コロナ禍がこれほど長引き続くこと」等々を予想していた人がどれほどいたであろう。

この間、世界中の人々の生活は否応なしに一変させられた。日本の子どもたちも同じである。二〇二〇年二月二七日、首相の独断で全国の小学校、中学校、高等学

校、特別支援学校等の臨時休校が要請されて以降、突然学校に行けなくなって、大好きな友だちや先生と会えなくなった。気持ちの整理もできないまま、新年度を迎えなければならない状況にもなってしまった。また、登校が再開されてからも、かつてとはまったく異なる学校生活を余儀なくされている。現在も、一度目の緊急事態宣言というように、終わりの見えない混乱の真つ只中といえる。正に、緊急事態である。もちろん、このような事態は日本だけのことではない。二〇二〇年四月八日、国

連子どもの権利委員会はパンデミックが子どもに及ぼす重大な身体的、感情的、心理的影響を警告し、「子どもの権利」を保護するよう各国に要請している。そのため、「子どものからだと心・連絡会議」と「日本体育大学体育研究所」は、長期休校中と休校明けの二度に亘ってコロナ緊急調査を実施した。まずは、子どもが置かれている現実を知る必要があると思ったからである。

本稿では、今回の緊急調査の結果を基に、ウイズ・コロナ時代、ポスト・コロナ時代の子どもの「育ち」と「学び」について考えてみたい。

緊急調査の結果が教えてくれること

今回の緊急調査は急な呼びかけであったにもかかわらず、二〇二〇年五月実施の休校中調査に、埼玉、東京、神奈川、静岡の公立小学校、中学校が三二校も参加してくれ、二四二三組の小中学生とその保護者の声を集めることができた。その後、およそ三カ月間に及んだ休校措置が解かれて、多くの地域で学校が再開されたのは五月下旬のことであった。分散登校や時差登校からはじまり、次第にいつもの日常を取り戻すのかと思いきや、そ

うともいわずに窮屈な学校生活が強られる中、休校明け調査が行われたのは二〇二〇年六・七月のことであった。この調査にも、一三四一組の小中学生と保護者が回答してくれた。さらに、健康診断のデータ収集にも努め、その分析を進めることにした。

紙幅の都合から、ここでは子どもの困りごとと保護者の心配ごとの回答結果、ならびに健康診断の分析結果の一部をご覧いただきたい。

図1は子どもの困りごと、図2は保護者の心配ごとを示したものである。ご覧のように、子どもの困りごと（図1）、保護者の心配ごと（図2）、同一項目で比較できるすべての項目（二二項目）で休校中に比して休校明けの訴えが減少していた。このような結果は、長期休校が子どもを困らせ、保護者を心配させていたことを教えてくれている。当然といえば、当然の結果である。ただ、休校中調査における子どもの困りごとと保護者の心配ごとの上位五項目を見比べてみると、両者の順位が微妙に異なる様子も示された。この事実からは、おとなの認識とは異なる子どもからみた学校の存在意義を垣間見ることができた。

他方、図3、4には、二〇一九年度と二〇二〇年度の